

# 展望的記憶と記憶補助ツールの関係性について～人格特性の影響～

1032044 川渕将信

指導教員：山崎治 准教授

## 1. はじめに

現在、大学生や社会人など予定に基づいて行動をする人の多くは、予定を忘れないようにするために手帳や携帯電話などの記憶補助ツールを使用している。また、近年ではスマートフォンの普及により、さまざまな記憶補助ツールのアプリなど数多く存在する。勝又(2009)では記憶補助ツールにおける「利用頻度、有効性認知、コスト認知」の相互関係について質問紙調査を行った。しかし、記憶補助ツールの利用の仕方には、ユーザの人格特性も深く関わると考えられる。

## 2. 目的

人格特性と記憶補助ツール利用の特徴との関係を調べることで、各々のユーザに適したツールやその使い方の提案ができると考えられる。本実験では、「認知的熟慮性・衝動性尺度」「改良型セルフ・コントロール」「外的要因による行動のコントロール」の3つの人格特性を考慮し、「利用頻度、有効性認知、コスト認知」への影響を調べる。

## 3. 調査

### 3.1 方法

**調査対象者：**学生200名，社会人200名の計400名を調査対象とした。

**調査内容：**調査は、予備調査と本調査に分けて実施された。予備調査では、職業およびよく利用する記憶補助ツールの種類について設問を設けた。本調査では、勝又(2010)が用いた設問とともに、堀(2001)により作成された「認知的熟慮性・衝動性尺度」と、杉若(1996)により作成された「セルフ・コントロール尺度」の設問を用いた。

勝又(2010)が作成した設問は、「ツールの利用頻度」8問、「ツールの有効性認知」5問、「ツールのコスト認知」8問、計21問で全て5段階評価であった。

「認知的熟慮性・衝動性尺度」は10問からなる4段階評価であった。また、「セルフ・コントロール尺度」は、下位尺度として「改良型セルフ・コントロール」8問と、「外的要因による行動のコントロール」7問の計15問からなる6段階評価であった。

**手続き：**調査対象者の募集および調査実施は、すべてmixi research社のWebシステム上で行われた。同社サイト上でアンケートページを作成・登録後、同社の登録モニタに告知され、各モニタが回答を行った。

### 3.2 結果

データのクリーニングの結果、分析対象は345名となった。共分散構造分析(AMOS)を用いて、各ツールにおける「利用頻度」「有効性認知」「コスト認知」の相互の関連と各「人格特性」との関連を分析した。分析結果となるパス図を図1に示す。

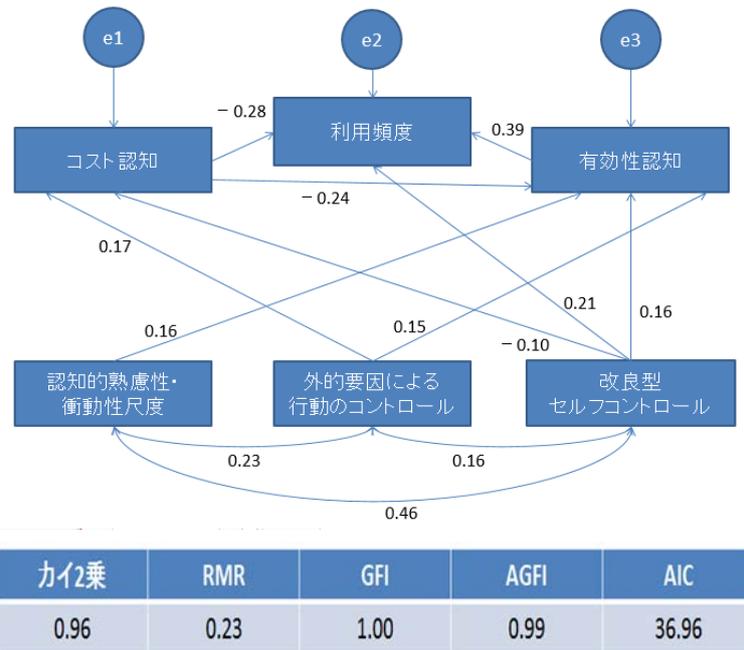


図1: 人格特性と「利用頻度」「有効性認知」「コスト認知」のパス図

「改良型セルフコントロール」は、「利用頻度」および「有効性認知」には正の影響を、「コスト認知」には負の影響を与えており、その中でも「利用頻度」への影響が最も強かった。この結果から、将来の結果を見据え行動を改善する志向性が高い人は、記憶補助ツールの利用コストを低く、また有効性を高く評価し、これにより、利用頻度が高くなると考えられる。

## 4. まとめ

今回の研究で3つの人格特性の「利用頻度、有効性認知、コスト認知」への影響がわかった。今回注目した「セルフコントロール」および「認知的熟慮性」は、記憶補助ツールの利用に正の影響がある人格特性と考えられる。今後は利用頻度と有効性認知に対して負の影響をもつ人格特性がどのようなものであるかを調べる必要がある。

## 参考文献

- 堀 洋道(監)(2001). 認知的熟慮性・衝動性尺度 山本 真理子(編) 心理測定尺度集 I 株式会社 サイエンス社出版 p195-198.
- 勝又 昭容(2010). 展望的記憶に関する記憶補助ツールの影響—利用頻度・有効性認知・コスト認知の関連— 千葉工業大学情報科学部情報ネットワーク学科 2009年度卒業論文 (未公開)
- 杉若弘子 (1996). 質問紙法によるセルフ・コントロール 奈良教育大学紀要 45(1) 165-176.